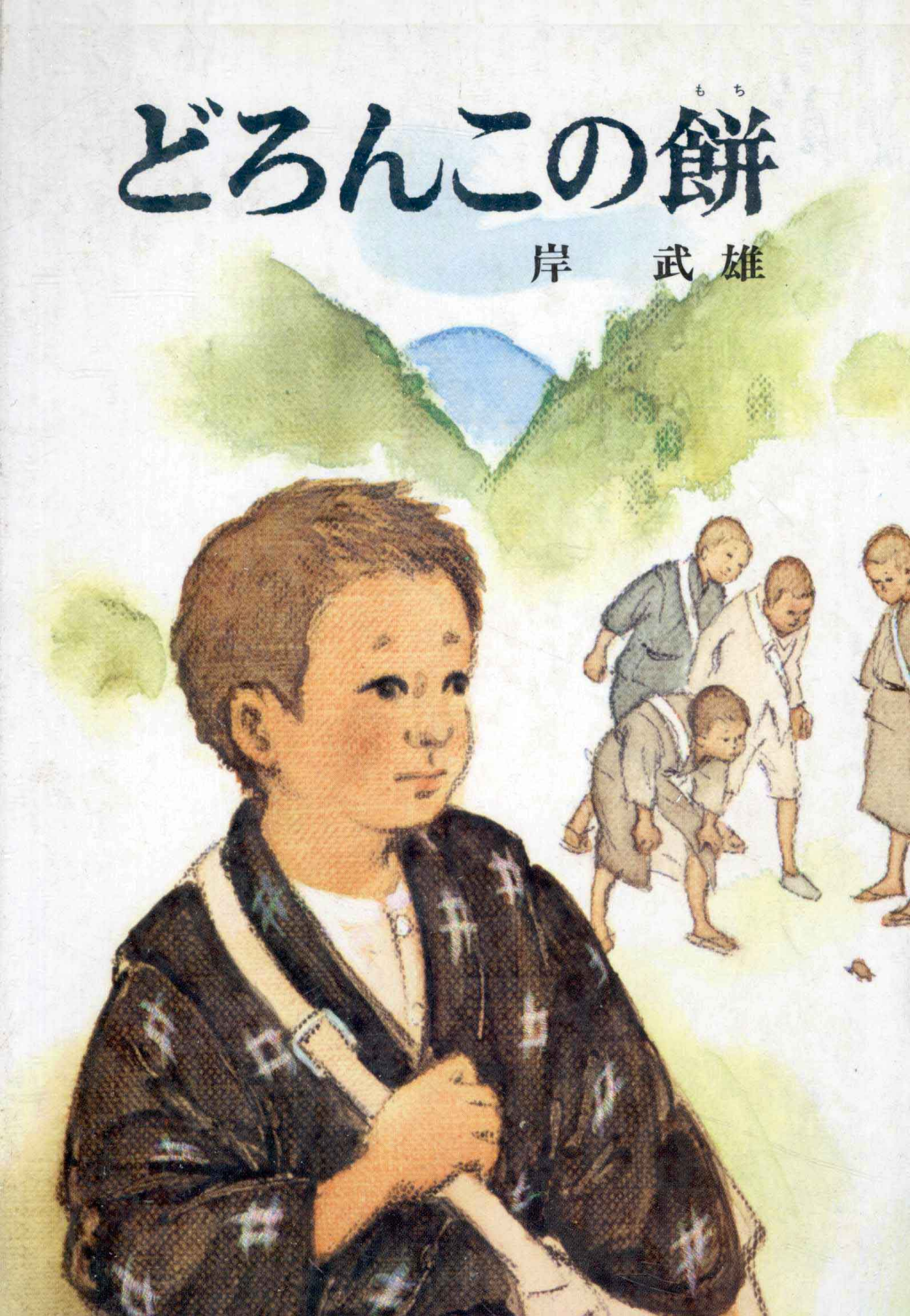
# どろんこの餅（もち）

岸　武雄



岸　武雄

少年少女／創作文学

どろんこの餅

N. D. C. 913　　偕成社　214p.　21cm　1975年

発　行　1975年5月

著　者　岸　武雄

発行者　今村　広

発行所　株式会社　偕成社

東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5

TEL (03) 260—3221 (代) 〒162

振替　東京1352番

本文印刷　新興印刷製本株式会社

多色印刷　小宮山印刷株式会社

製　本　文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-719320-0904

© 岸　武雄　1975

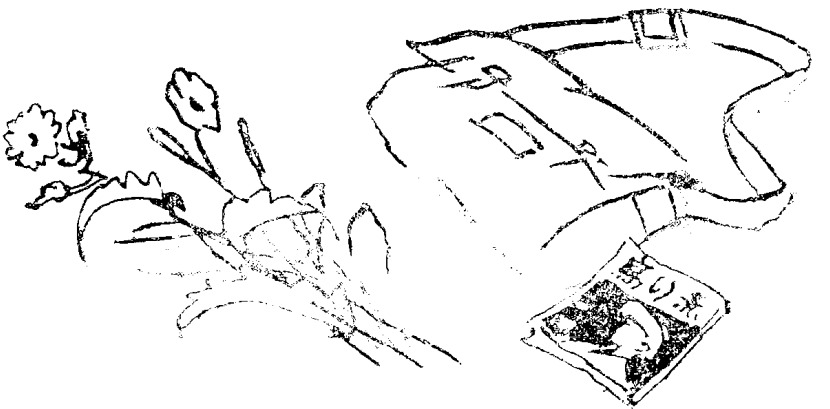
Printed in Japan

# どろんこの餅

岸　武雄

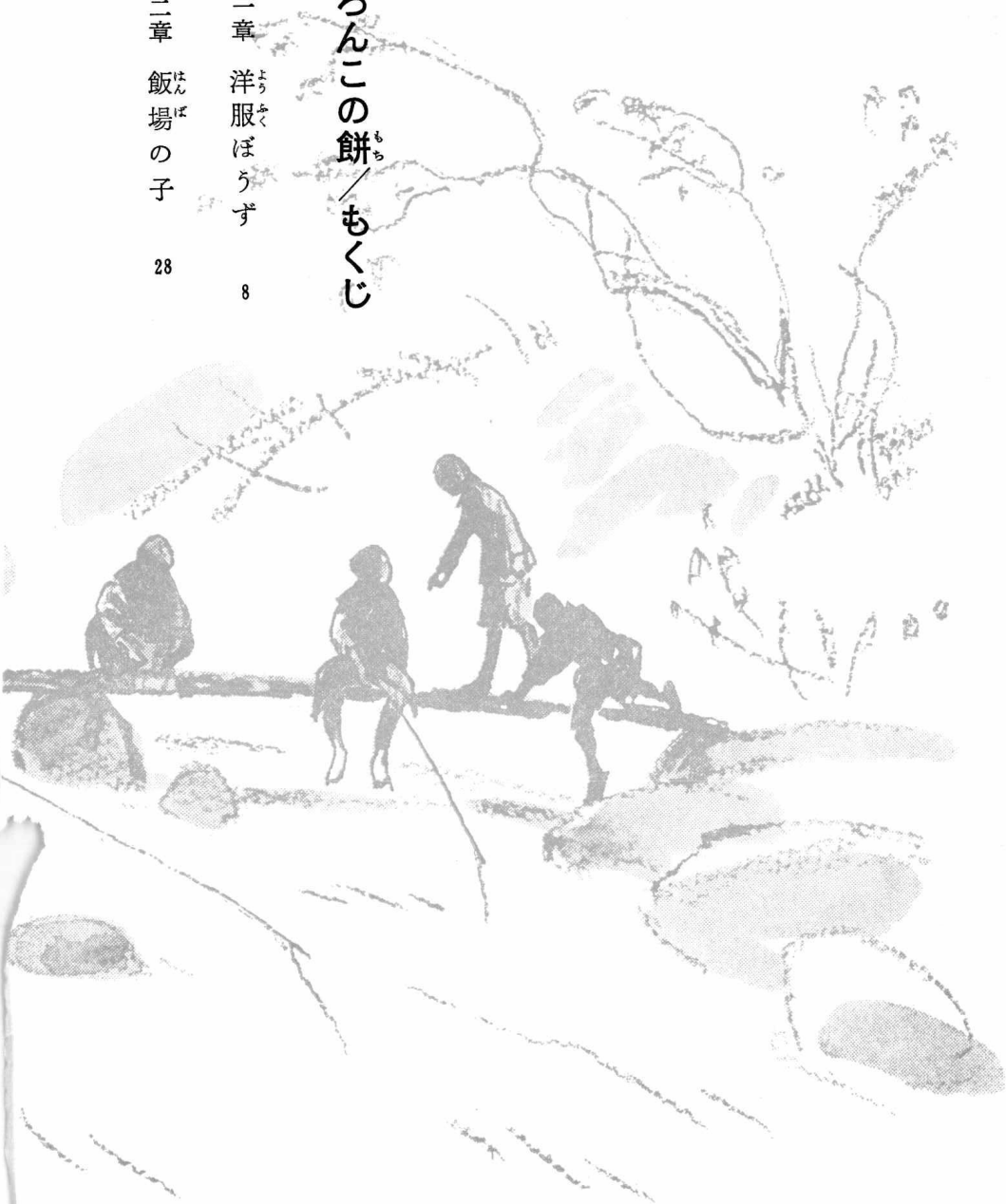
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

かすりの着物をきて、わらぞうりをはき、
ぽかんと口をあけて、あるいている。
気のよわいくせに、いたずらずきで、
ときには、思わぬことをしてしまう。
しかし、いつもはおとなしいほうで、
いろんなことを心で感じながら、
大きな目で、だまってながめている。
——わたしは、小さいときこんな子ども
でした。



# どろんこの餅／もくじ

第一章　洋服ぼうず　8
第二章　飯場の子　28



第三章　パラダイス　49
第四章　黄色い日がさ　70
第五章　赤い鳥・小鳥　91
第六章　ことばカード　120
第七章　〈おこうもり〉の朝　136
第八章　「飛行少年」　152
第九章　ハッパとラクバン　169
第一〇章　どろんこの餅　187
作者と作品について＝赤座憲久　210

著者・岸（きし） 武雄（たけお）

1912年，岐阜県に生まれる。岐阜師範学校卒業後，教職に従事し，現在，岐阜大学附属小学校主事。主な著書には『子どもが耳をすますとき』『もぐりの公紋さ』『千本松原』『炭焼きの辰』『化石山』『プータス大王のいたずら』『飛騨の馬小作』等がある。現住所／岐阜市長良光栄町2-6

画家・松井行正（まついゆきまさ）

1912年，東京に生まれる。河井清一氏に師事し絵を学ぶ。文芸書・児童書のさし絵などに気品のある画風で活躍している。現住所／東京都練馬区貫井2-42-2 ニューパールマンション403号

# どろんこの餅（もち）

岸　武雄

# 第一章　洋服ぼうず

## 1

大正八年（一九一九年）四月、おれは青山小学校の四年生になった。

四月のある朝のこと。

川ばたにある家から新道へのぼり、学校へあるきはじめたおれは、けさはどうもおかしいぞ、と思った。キク、カイチ、ノブなどいつもの連中が、さっぱりすがたを見せんし、道にはもうっすらと日がさしておる。

山のふかいこの青山村では、まず西の山のいただきがもえはじめ、つぎに西の村が赤うそまり、やがて揖斐川をこえて、日はゆっくりと東の村へさしてくる。おれたちは東の村なので、学校へ行くころは、いつもみずうみの底のような、青い朝もやのなかをあるいてゆくのだ。

――へへっ、ちこくか。えらいこっちゃ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おれは舌うちをすると、かたからななめにさげたカバンをおさえて、ひっそりとした村のなかを走った。

やっぱり学校は、もうはじまっておった。一、二年生の教室のあたりに、ハーイ、ハーイと声が聞こえるだけで、学校は山を背にしたまま、しーんとしておる。おれはいよいよむねをはずませて運動場を走っておると、校舎をまわるかどで、ふいに大きなやわらかいものにぶつかった。

「ほ、ほ、ほ……ごめんなさいね。」

女の人は、赤い着物のそでを口にあててわらった。パッと花がさいたような気がした。あっけにとられて見とれておると、ふうんとええにおいがあたりにながれた。

——だれやろ、町のおくさんやなあ。

おれは、うしろをふりかえりながら、げた箱のあるげんかんへあるいた。

わらぞうりをぬいで、いつものところへいれようとすると、そこはもうはきものでつまっておった。

「くそっ、あほうめ、ここはおれんどこやぞ。」

むかっぱらをたてたおれは、そいつをつかんで土間へほうりだした。

「おりょ、りょ……ゴムぐつ！」

おれは、びっくりしてしまった。

そういえば、つかんだときの手の感じがおかしかった。おれはそこへしゃがみこんで、土間にころがっておるゴムぐつを、おそるおそるなぶってみた。コンニャクをつかむような気がした。よく見ると、くつはあめ色で、はんぶんすきとおっておる。ゆびでピンとはじいてみると、生きもののようにこまかくふるえる。

それにしても、おれのところへゴムぐつがはいっておるとは、ふしぎなことだ。だいいち、この学校でゴムぐつを持っておるやつは、郵便局長のひとりむすこのケンジだけだ。そのケンジも、式のあるときしかはいてこない。

おれは、キツネにつままれたような気持ちになって、ろうかをあるいた。

さいわい、きょうは先生のきげんがようて、おれは立たされずにすんだ。ほっとしてカバンをしまっておると、まえのほうの席に、洋服をきた男の子が、ぽつんとすわっておるのに気がついた。

「なんや、あの洋服ぼうずは。」

おれは、となりのキクのわきばらをつついた。

「発電所の工事のやつや。えらいさまのむすこやと。」

「ほほう……なんやしらん、なまっじろうて、おなごみたいなやつやなあ。」

おれは、白いくびすじを見てささやいた。

「ふんとや……けど、先生の話によると、あんなやつが、これからいっぱいこの村へはいってくるんやと。」
「ふうん。」
おれはそうこたえたが、洋服をきてゴムぐつをはいた西洋人のようなやつが、どんどんはいってくると思うと、たのしみのような、ちょっと心配なような、へんな気持ちになってくる。
洋服ぼうずは、ばかに姿勢のええやつで、床の間のおきもののようにうごかん。えろうまじめなようにも思えるし、いばっておるようにも思える。
――おかしなじんが、はいってきたわい。
おればかりではない、組のものはみんな、洋服ぼうずを気にしておるのだろう、ヒラメのような目をして、ちょくちょくながめておった。
休み時間になると、おれたちはかたまって、わざと大声をだしてあそんだ。
「おもしろいねや。」
「ふんとに、おもしろいねや。」
そうさけびながら、ときどき洋服ぼうずのほうへ目をやると、あいつは、おれはカンケイないぞ、というように、ズボンのポケットへ手をつっこんで、ゆっくりとあるきまわっておる。
おれたちは、根負けして、とうとう洋服ぼうずのそばへよっていった。

「おんしは、なんという名や。」
キクが、まっさきに口をきいた。
「おんし？　は、は、は……ぼくのことですか。ぼくの名は、さっき先生がいったでしょう、オオカワラ・コウゾウ。」
洋服ぼうずは、白い歯を見せてわらったあと、じぶんの名まえを、ひとことひとことくぎるようにいった。
キクはむっとして、鼻の下をこすると、あわててまたたずねた。
「な、名まえはわかっとる。おんし、ど、どこから来たんや。」
「東京です。」
洋服ぼうずは、あたりまえのようにおちついていう。
――な、なに東京？
おれたちは、そのひとことにすっかりおどろいて、おたがいに顔を見あわせた。
東京といえば、三年の読本の『東京停車場』で、ならったことがある。おれは、いまでもそらでいえる。

## 二十六　東京停車場

東京停車場は東洋第一の大停車場で、宮城の東にあります。赤れんがの三階造りで、間口が百八十四間（やく三三一メートル）もあります。むかって右が入り口、左が出口で、まんなかが帝室用になっています。停車場の階上には、役所もホテルもあります。階下の入り口には、左右に大きな待合室があって、この外に中央郵便局の分室もあれば、両替店や、いろいろの売店もあります。また洗面所もあれば、食堂もあります。

この停車場から、毎日七、八千人ずつの人が乗り降りします。汽車の発着時刻が近づくと、自動車・馬車・人力車がいくだいとなく、入り口・出口によってきます……。

ここを勉強するとき、色のぬった掛け図を黒板につるして、先生があんまりほめるので、おれが「先生、東京へ行ったことがあるんですか」ときいたら、先生は赤い顔をして、「いや、いっぺん行きたいと思っとるが、まんだ行ったことがない」とこたえた。先生も行ったことがない東京に、こいつはすんでおったらしい。おれたちは、すっかりまいってしまった。

「東京の学校は、でかいやろなあ。」

カイチが、かすれたような声でたずねた。

「でかい？　ああ、大きさですか。いや、たいしたことはありません。でも、この青山学校の十倍くらいはあるでしょうね。」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com